

## 第2章 流動人口と養育価値志向

### 第1節 昆明市における親の養育価値志向

#### 問題設定

近年、中国都市部では、親の子どもに対する教育熱が益々高まっているようである。教育の受験偏重化傾向は、産業化の開始が遅れてきた国家社会ほど強められるといわれる。政治経済の急激な変革を経るため、それに対応した人材育成に公教育への依存度が高まり、また社会的上昇の機会をめぐっての進学熱が過熱するというのである<sup>(1)</sup>。例えば、大学受験においては、1978年に統一試験がスタートされたが、以来、受験競争の過熱・低年齢化を引き起こし、子どもの教育に大きな影響を与えているといわれる<sup>(2)</sup>。

中国都市部における、こうした教育達成への意欲（教育達成期待・教育アスピレーション）の分析に関しては、相対的に高学歴・高階層である知識人家庭において、子どもの大学進学を強く希望し、子どもを勉強に駆り立てる親の存在が認められている<sup>(3)</sup>。しかし本節では、主に農村の出身層であり、二元構造社会といわれる中国都市の下層に位置づけられる流動人口を含めた養育の価値観に関する調査ならびに分析をおこなう。また、そのための方法の手順として、そうした二元構造社会の存在を前提とするため、一大都市の都市民ならびに市内に居住している流動人口をサンプリングしたアンケート調査のそれぞれについて比較しながら考察をおこなう。

養育的な価値観を分析するための枠組みとしては、M.コーン(Kohn,M.L.)による、親の養育における価値志向(parental values)の概念を適用する。本章での調査研究の目的は、子どもの養育における客観的な行動や方法、あるいは期待の水準にではなく、親の養育行動の背後に存在し、養育意識の土台として根源的な方向づけとして機能しているであろう、養育的な価値観の志向性に焦点をあて、そうした主観的要因と社会階層的変数との関連を明らかにすることである。

よって本節では、コーンらの調査研究の枠組みを適用しながら中国都市でのアンケート調査の分析結果について、コーン理論の妥当・適合性を検討することによって、都市民ならびに流動人口というふたつの集団における養育に関する価値観の考察をおこなうものとする。

## 1 項 調査の意図と概要

### 1) 都市民と流動人口

まず、養育価値志向に関するコーン・モデルを中国社会に適用・検証しようとする際に考えられる中国特有の特異性として考えられるのは、序章で既述したように、改革開放経済への変革を経て 90 年代に入るまで、実質的には都市社会と農村社会とは物質的流通や人的交流が区分されており、都市と農村とがほぼ隔離された二元社会を形成していたことである。その意味で中国の都市社会は、先進諸国の都市と同様な産業社会といえる条件を完全に満たした状態にあるといえるのかどうかは不明である。

戦後のこうした時代的背景が続くなかで、都市部と農村部それぞれの社会の間おける人々の日常的な情報交換の場やネットワークは極端に減少し、文化や価値観の共有も衰退し隔離されてきた結果、両社会間の異質性が高められていったと考えられる。しかしその一方で、都市・農村部それぞれの内側では、いわば閉じた社会構造的な空間のなかで逆に同質性が高められるような文化的諸条件が存在してきたのではないだろうか。つまり、一国のなかで都市部と農村部というふたつの断絶された社会をもつ中国独自の歴史・文化・政治的背景は、都市・農村社会それぞれにおける学歴や職業などの階層的要因が、人々の価値観に与えているはずの心的な影響の機能を低下させる、あるいは前産業化社会における人々と同様に心的影響がほとんど存在しない可能性も考えられる。

ここで中国でのアンケート調査において、コーン・モデルの価値志向分析の結果、回答者の価値志向に対して階層変数による影響がみられない場合の解釈をまとめてみると、以下の から のような仮説が考えられる。

職業的地位と職業的諸条件(職業的自己指向性)との関連がない、あるいは少ないこと。

職業的諸条件(職業的自己指向性)が、中国社会独自の歴史、文化、政治経済の影響によって特異なものになっていること。

中国社会の独自性が、職業的地位(社会構造)による効果を凌駕して、価値観(養育価値志向)に影響を及ぼしていること。

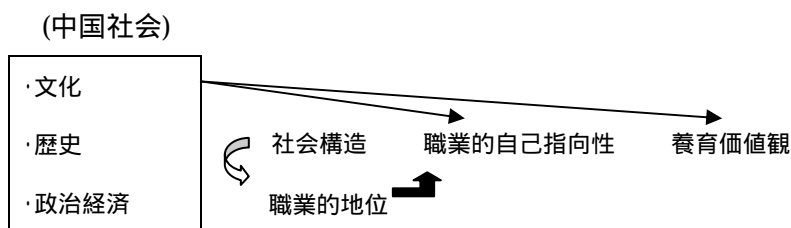
これら 3 つの仮説を図示したものが図 1 である。 ならびに の作用については、中国社会における職務構造一般が問題となる。例えば、中国の国有企業では、管理部門と現場が別構造となりオーバースタッフingが起きていることが多い<sup>(4)</sup>。そのために一日の労働

時間が極端に少なかったり、複数の仕事に従事していたりするケースも出てくる。また、いわゆる歴史的な「単位」制度社会の、職場社会に対する浸透などにより、職員を管理する機能がほとんど働いていない場合も多いともいわれている<sup>(5)</sup>。これらの影響により、個人の生活全般における職業労働生活の比重や、職業自体に対する捉え方・感覚にまで欧米先進諸国の社会のそれとは異なる中国社会の独自性が作用している可能性がある。つまり、少なくとも職業的地位という階層区分に応じてコーンのいう職業的自己指向性が高められるような構造が明確には存在していないのかもしれない。

そして仮説 は、中国社会におけるコーン・モデルの否定である。つまり、国家社会固有の歴史・文化・政治経済等の影響により、産業化社会の社会構造(職業的地位)における職業生活の効果(=学習の転移)が打ち消されるという意味である。この仮説 には、前述したように歴史的な都市と農村との社会間における隔絶、ならびにそれぞれの社会における階層・文化的な均一化によって、それらの変数と養育価値の志向性との関連がみられないことが含まれる。さらに、この仮説 に関しては、同様に学歴が養育価値の志向性に影響を与えていなかった場合、その原因に対する解釈としても適用されるであろう。

よって、本節では流動人口のサンプリングによるアンケート調査のみではなく、別個に流動人口が居住する同一地域(=同一都市内)の都市民を対象としておこなった調査結果をも分析・検討することによって、コーン・モデルの解釈の可能性および中国社会の独自性によるそれらへの影響を明らかにする。

図1 コーン・モデルの不適合に関する仮説



## 2)調査対象地域の様子(雲南省昆明市)

本調査でアンケート調査の対象地域とした昆明市は雲南省の省都であり、市の中心街の人口は200万人を超えており、市区域全体では470万人余りの人口を有する大都市である。雲南省全体に観光名所が多いため、改革開放以来一大観光都市としても賑わいをみせてい

る。また、99年には世界花博覧会が開催され、多くの外国人観光客のスポットを浴びることとなった。市の中心街近くにある雲南大学は重点大学に指定されており、薬品開発関連の校営企業に大きな資本が投入されている<sup>(6)</sup>。そして、中国の大都市のなかでは新興都市の部類に入ることから、比較的近年に入ってより多くの流動人口を引きつけている都市でもある。

昆明市には、省内外から流入人口が増加し、多くの流動人口が移住し始めており、昆明市の下層を形成している。市の流動人口の全体数は少なくとも100万人を超え(2002年時点)であり、以後も更なる増加が見込まれている<sup>(7)</sup>。市内をつぶさに観察してみると、市の中心部・郊外を問わずいたる場所に流動人口のスラムが形成されているのがわかる。これらの場所については治安の悪化などに関する噂も多い。

近年、昆明市ではこうした流動人口の戸籍区分の規定に関して、これまでのような厳格な隔離政策を改めはじめている。例えば暫定居住証の有効期間の延長や撤廃、または結婚や市内就労による市民戸籍取得の可能性が導入されたが、これらは主に、限られた都市出身の流入市民のみに門戸を開くための制度転換といえる。何らかの社会・人・物的な資本を所有せずに市内に流入してくる圧倒的多数の流動人口にとっては、依然としてそのほとんどが地元都市民と比較して差別的な状況のままであり、その結果、流動児童学校の設立が市内に100校余りにも上っているといわれる<sup>(8)</sup>。よって本研究において目的とする、一都市内における都市民ならびに流動人口の調査の対象地域、かつ、対象回答者データの収集地とした。

### 3) 調査概要

調査の概要については以下(表1)の通りである。

対象となった昆明市民の回答者は、昆明市の公立(2箇所)ならびに民営の流動児童学校(2箇所)における、主に中学生1,2年生の保護者を対象として、それら学校教員による指導のもとに配布、回収がなされた。2校とも市の中心部に設立されているが、そのうちのひとつは師範大学の付属校でもあるため、とくに市民の回答者の保護者において全体的に社会経済的地位が高いことが想定される。実際に、回答者の学歴に関わる項目をみると、高等教育以上の学歴のある回答者が約6割を占めている。また、職業的地位の内訳をみても、管理職あるいは専門職に区分される回答者が約66%を占めており、個人自営業や技能工層の割合が低い。

一方、拠点としたふたつの流動児童学校における調査は、筆者が市内を踏査することにより見つけ出し、それらの校長(経営者)に直接要請して実現されたものである。一般的に流動児童学校はスラムから程遠くない場所にあることが多いのは当然であるが、それらスラム自体は市中心部に近ければ旧市街区や区画未整理区に多い。あるいは、市の中心部の東西にまたがって伸びるバスの運行する幹線道路沿いに集落をみつけることができる。とくに郊外ならばそのように延びた幹線道路の区部と郷部の境界付近であればすぐにでも見つけられるほど多い。通勤アクセスの事情によるものと考えられる。

本調査でサンプル収集拠点としたそれら2校は、地理的にはちょうど昆明市街地の北側と南側の2地点である。ふたつの流動児童学校の校長たちは、共に突然来校した筆者の申し出を聞くとすんなりと快諾し協力してくれたのであるが、これは一般の公立学校でならあまりありえないことであった。というのも、流動児童学校の経営者である校長にとっては、通学している児童の保護者に教育に関する質問票を送りつけるということが、何らかの学校の家庭に対するケアやサービスにつながっていると解釈されたのだった。ゆえに筆者の調査の要請は経営上、歓迎されたといえる。このように経営にとって有益なことならどんなことでも取り入れようとする前向きな姿勢は、流動人口の生活態度にも共通してみられる。

表1 調査概要ならびに属性

時期：	2001年6月下旬から7月上旬(於公立学校調査) 2003年3月下旬から4月上旬(於流動児童学校調査)						
拠点：	<table style="border: none;"> <tr> <td style="border: none;">雲南省雲南師範大学附属中学校</td> <td rowspan="2" style="border: none;">} 昆明市民児童</td> </tr> <tr> <td style="border: none;">雲南省昆明市第八中学校</td> </tr> <tr> <td style="border: none;">雲南省昆明市蓮園実験学校</td> <td rowspan="2" style="border: none;">} 流動人口児童</td> </tr> <tr> <td style="border: none;">雲南省昆明市陽家錦程学校</td> </tr> </table>	雲南省雲南師範大学附属中学校	} 昆明市民児童	雲南省昆明市第八中学校	雲南省昆明市蓮園実験学校	} 流動人口児童	雲南省昆明市陽家錦程学校
雲南省雲南師範大学附属中学校	} 昆明市民児童						
雲南省昆明市第八中学校							
雲南省昆明市蓮園実験学校	} 流動人口児童						
雲南省昆明市陽家錦程学校							
調査対象：	中学1、2年生の保護者(昆明市民) / 小学5、6年生の保護者(流動人口)						
調査票回収数：	405部						
有効回答数：	315部(昆明市民 = 140部 / 流動人口 = 175部)						
回収方法：	いずれも教員を通じて、生徒から父母まで配布してもらい、また回収も学校教員を通じて行った(留置法)。						
主な調査項目：	対象者の社会的属性 Kohnによる13個の価値項目						
備考：	調査票の回収数に比べて有効回収数が少なかったのは、流動人口サンプルに不適切な回答記述が多くみられたためであり、このことは教育水準の低さによる識字率の低さに起因するものと思われる。したがって、こうしたサンプルがあらかじめ排除されていることを指摘しておきたい。						

#### 4) 回答者の属性とその比較

公立学校の保護者のほとんどは昆明市民(本地人)と考えられるが、流動児童学校の保

護者の本籍地はほとんどが市民ではない外地の人々である。集計によると、出身省の内訳は 15 省以上にまたがっており、多いものから順に四川省(21.5%)、雲南省内(15%)、貴州省(9%)、江西省(3%)、湖北省(2.5%)、その他・不明となっている。中国西部の流動人口の割合が比較的多く、大都市昆明に集まってきていることが察せられる。

全回答者の保護者の性別は、父親が 6 割ほどで母親が 4 割である。また、年齢区分をみると、30 歳代から 40 歳代で 9 割強である。また全体で、学校から調査票を受け取った子どもの性別割合は、男女共にほぼ半数であった。

表 2 都市民と流動人口の年齢段階 (%)

	都市民	流動人口	合計(N=306)
20 歳代	0	4.2	2.3
30 歳代	44.3	76.5	61.8
40 歳代	52.1	16.9	33.0
50 歳代	3.6	2.4	2.9

p < 0.01

表 3 都市民と流動人口の学歴 (%)

	都市民	流動人口	合計(N=316)
小学卒	1.4	25.6	14.9
中学卒	12.9	55.7	36.7
高校卒	25	15.9	19.9
短大・専門卒	33.6	2.3	16.1
大学卒	20.7	0.6	9.5
大学院卒	6.4	0	2.8

p < 0.01

表 4 都市民と流動人口の職業形態 (%)

	都市民	流動人口	合計(N=316)
無職 / 臨時	43.6	97.2	73.4
事務	10.0	1.7	5.4
専門 / 管理	46.4	1.1	21.2

p < 0.01

表 5 都市民と流動人口の民族籍 (%)

	都市民	流動人口	合計(N=314)
漢民族籍	93.6	28.2	57.3
少数民族籍	6.4	71.8	42.7

p < 0.01

しかし、ここで都市民と流動人口の年齢段階の割合を比較すると、都市民の回答者の場合では 40 歳代の割合が最も高い(52.1%)のに対して、流動人口の回答者の場合では 30 歳代大多数(76.5%)である(表 2 参照)。このことは、子どもの年齢にあまり差がないことを考えると、都市民に比べて流動人口のほうが早婚であり、出産もより早い年齢段階でおこなわれていることを示している。また、都市民と流動人口との学歴レベルを比較した結果では、都市民ではその約 6 割が高等教育を修了しているのに対し、流動人口の回答者では、その 8 割以上が中学卒業レベル以下であり、高等教育レベルはほとんどない(表 3 参照)。

同様に、職業形態の比較については、流動人口の回答者の 97%以上が、出稼ぎ形態の臨時的な職業に就いているか無職である。一方、都市民の場合では回答者の 5 割以上が正規

の事務職や、専門・管理職に就いている(表4参照)。

さらに、都市民と流動人口の民族籍について、漢族とそれ以外の少数民族籍に区分した割合では、都市民では9割以上が漢族なのに対して、流動人口ではその約7割が少数民族籍であった。これは、本調査に限ったケースであるが、雲南省という少数民族籍の人口割合が高い地理的条件がサンプリングに反映したものであると考えられる。

以上の本アンケート調査における回答者の属性の集計結果から示されたことは、都市民の回答者の属性と流動人口のそれとの階層的差異である。都市民の回答者に比べて流動人口の回答者は、年齢が若く学歴や職業的地位が低い。また、民族的マイノリティの割合もより高いことがわかる。

## 5) 調査方法

具体的な13の養育価値志向の項目およびそれらの回答方法は、以下のような様式の手順によっておこなっている。

〔質問文〕 (日本語訳・原文は漢語)

下記に挙げられている13の特質のうち、お子さんの将来にとって

- ・ 最も重要と思われるものを、3つ選んでください。
- ・ その3つのなかで、一番重要だと思われるものはどれですか。
- ・ この表に挙げられているものはどれも望ましいものばかりですが、そのなかで重要でないと思われるものを3つ挙げてください。
- ・ その3つのうち、最も重要でないと思われるものはどれですか。

礼儀正しいこと 成功しようと努力すること 正直なこと 身だしなみがよく、清潔であること 良識・健全な判断力をもつこと 自制心をもつこと 男らしく/女らしく行動すること 他人と協調できること 両親に従うこと(従順さ) 責任感があること 他人に思いやりがあること 物事がなぜ、どのように起こるかに興味をもつこと よい生徒であること
---

このようにして13の価値基準を順序づける方法は、一般にインサティブ・メソッドと呼ばれる。具体的には、「一番望ましいもの」に5点、それを除く「最も望ましいもの」に4

点、反対に「一番重要でないもの」に1点、それを除く「最も重要でないもの」に2点を与え、その他の選択されなかったものに3点を一律に与える。これにより、「一番望ましいもの」から「最も重要でないもの」まで5段階の順序尺度で回答者が評価を与えるわけである(=5問法)。

しかし、この方法はコーンをはじめとして最も一般的におこなわれてきたものであるが、問題点がないわけではない。とりわけ、回答者による評価が与えられなかった3点の選択肢が、7/13の確率で存在するため、平均が3点前後に集中する傾向があり、相関係数も低くなる傾向がみられる。とはいえ、本調査では先行調査との比較のためにこの従来型の様式を用いて分析する。

## 2項 調査結果と考察

### 1) 項目得点の結果：国際間の比較

はじめに、回答者全体の平均値を概観してみたい。表2は合衆国、日本、そして、本調査による中国の平均得点を並べたものである。合衆国の値は、コーンの全国調査研究によるものであり、また、日本の値はSSM調査における結果である<sup>(9)</sup>。両者の回答結果の抜粋とともに、子どもの年齢が中学生である親のものに限定している。

表6 養育価値項目の平均得点の中日米比較

	礼儀	成功	正直	身だし	良識	自制心	男/女	協調性	従順さ	責任感	思いやり	興味	よい生徒
米(1964)	3.13	2.80	3.97	2.78	3.31	2.93	2.67	2.99	3.49	3.09	3.12	2.32	2.81
日(1985)	3.41	2.60	3.67	2.68	3.73	3.05	2.32	3.33	2.82	3.74	3.41	2.34	2.07
中(2003)	3.02	3.48	3.82	2.89	3.32	3.03	1.82	2.84	2.95	3.57	2.88	2.31	3.08

一見して、日米の二国と比較して、中国サンプルの特異性が明確にあらわれている項目として挙げられるのは、「成功しようと努力すること」および、「男らしさ/女らしさ」の二項目である。

まず、「成功しようと努力すること」に対する得点は、合衆国(2.80)ならびに日本(2.60)に対して中国(3.48)となっており、中国の親の子どもに対する強い立身出世的な価値期待を感じさせるものとなっている。この要因をここで説明してしまうことは無理があるが、例えば、「望子成龍」(子どもが大成することを願う親の気持ちを表わす言葉)などよくいわれている<sup>(10)</sup>ように、とりわけ一般的にも子どもの将来の成功に強い期待を抱いていること



が伺える。また、「男らしさ／女らしさ」の評価得点(1.82)は、他の二国と比較して特に低くなっている。これは、本調査における殆どのサンプルが、この項目を「最も重要でないもの」として評価していることを示しており、若干の補足説明が必要であろう。

大きな理由のひとつとして考えられるのが、現代中国における女性の社会的地位の高さとそれを支えた政治経済的背景である。1992年には「中華人民共和国女性權益保障法」が実施され、また現実の生活における男女平等にも、経済的な基盤や発展の方向と思想的雰囲気提供されている。例えば社会調査(1990年)の統計によると、中国女性の9割弱が生産労働に参加しており、かつ、その殆どがフルタイムで働き、平均月収は男性の平均月収の81.68%であるという<sup>(11)</sup>。本調査による属性の結果でも、無職を含む家事労働のサンプル(専業主婦層)は全体のわずか1.5%ほどであり極めて少ないといえる。家庭における女性の地位も、低いという認識はほとんど存在しないようである<sup>(12)</sup>。したがって、本調査対象の昆明市民においても、「男らしさ／女らしさ」の評価項目の値に、新中国誕生から50年来の、社会主義社会による大きな影響があらわれているといえてよいであろう<sup>(13)</sup>。

## 2) 都市民と流動人口の養育価値項目の結果

まず、都市民と流動人口とにおける13の養育価値項目の得点を単純に比較した結果が表7である。やはり3点の得点前後に集中しているが、「良識・健全な判断力をもつこと」「責任感があること」「物事がなぜ、どのようにおこるか興味をもつこと」の項目に関しては、都市民の回答者のほうが流動人口の回答者よりも相対的に高い平均得点の結果がでていいる。逆に、「身だしなみがよく、清潔であること」「従順さ」「よい生徒であること」の項目では、流動人口の回答者のほうが都市民の回答者よりも高い平均得点の結果であった。

これらの平均得点の差異の結果をみると、子どもの養育に関してより自己指向的な価値に重きを置いていると考えられる項目では、都市民の回答者が流動人口の回答者の得点よりも相対的に高得点であったといえる。しかし、より権威に対する外面的な同調に重きが置かれていると考えられる項目については、流動人口の回答者の平均得点のほうが都市民のそれを上回っているといえる。このことはつまり、都市民のほうが流動人口よりも自己指向的な養育観をもっているが、逆に、流動人口では都市民よりも同調的な価値観をもっている傾向があることを示している。

つぎに、都市民と流動人口における以上のような13項目の養育価値項目の得点の差異に統計的な根拠があるのかどうかを証明するため、両集団間でt検定をおこなった結果が

表8である。とくに0.01%の有意水準で得点の差異がみられる項目として、「身だしなみがよく、清潔であること」「従順さ」「責任感があること」「よい生徒であること」が確認された。また、1%の有意水準では「良識・健全な判断力をもつこと」「物事がなぜ、どのようなおこるか興味をもつこと」の項目で差異が確認された。したがって、各養育価値項目の得点に関する都市民ならびに流動人口の両集団間の比較の結果、自己指向的な価値観が表象されていると考えられる複数の項目について、都市民では流動人口よりも重んじているが、外的権威への同調を表象していると考えられる複数の項目については、都市民よりも流動人口のほうがより重んじていることが示された。

表7 都市民と流動人口の養育価値項目の得点

養育価値項目	都市民(N=140)		流動人口(N=176)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
礼儀	2.96	0.66	3.06	0.72
成功	3.59	0.89	3.39	1.10
正直	3.89	0.88	3.77	0.92
身だし	2.68	0.60	3.06	0.52
健全な判断	3.49	0.99	3.18	0.94
自制力	3.16	0.66	2.93	0.98
男・女らしさ	1.73	0.90	1.89	0.95
他人と仲よく	2.78	0.64	2.88	0.69
従順さ	2.77	0.64	3.10	0.68
責任感	3.80	0.80	3.39	0.74
思いやり	2.88	0.52	2.89	0.58
興味	2.46	0.86	2.19	0.93
よい生徒	2.83	0.88	3.29	0.89

表8 養育価値項目得点の比較(都市民/流動人口)

	df	t
礼儀	314.0	-1.35
成功	313.9	1.73 <sup>†</sup>
正直	314.0	1.23
身だしなみ	275.7	-5.88 <sup>***</sup>
健全な判断	314.0	2.79 <sup>**</sup>
自制力	306.2	2.50 <sup>*</sup>
男・女らしさ	314.0	-1.56
他人と仲よく	314.0	-1.35
従順さ	314.0	-4.33 <sup>***</sup>
責任感	314.0	4.77 <sup>***</sup>
思いやり	314.0	-0.12
興味	314.0	2.71 <sup>**</sup>
よい生徒	313.0	-4.55 <sup>***</sup>

\*\*\* p < 0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

### 3) 養育価値諸項目と階層変数との関係

前述の結果における都市民と流動人口の回答者の養育価値項目得点の比較から、両集団間で養育に関する価値観に差異があることが明らかとなった。

ここで、これまでコーンの理論モデルが示してきたような養育価値の項目と階層的な変数との関連が、中国の一都市をサンプリングした本アンケート調査でも抽出されるのかどうか分析する。コーン・モデルによれば学歴や職業的地位の差異は養育価値項目の得点に関連しているはずである。すでに前述した都市民と流動人口の分析結果から、それらの異なる階層集団間で、養育価値項目の平均得点に違いあることが確認された。しかし、だからといって階層変数との関連が示されたわけではなく、それは都市民と流動人口というふたつの集団枠組自体の独自の要因によるものであるとも考えられる。

そこで、都市民と流動人口のそれぞれの集団内部において、個別に階層変数と養育価値項目の得点との関連を探るものとする。そうすることによって、ふたつの集団の枠組自体が有するであろう独自の影響を取り除いて階層変数だけの影響を検討することが可能となる。

表9 都市民における階層変数と養育価値項目との関連

	学歴	職業	身だしなみ	健全な判断	従順さ	責任感	興味	よい生徒
学歴		.210*	-.100	-.072	-.018	0.11	.130	-.150
職業			.054	.039	.117	-.049	-.104	.178*
身だしなみ				.01	-.08	-.105	-.237**	.004
健全な判断					-.232**	-.204*	.155	-.167*
父母の話						-.189*	-.185*	.262**
責任感							-.105	-.233**
興味								-.189*
よい生徒								

\*\*p<0.01, \*p<0.05

表10 流動人口における階層変数と養育価値項目との関連

	学歴	職業	身だしなみ	健全な判断	父母の話	責任感	興味	よい生徒
学歴		.347**	-.083	-.04	-.083	.231**	-.015	-.087
職業			-.018	.018	-.091	.040	.066	-.144
身だしなみ				-.232**	.194**	-.161*	-.257**	.126
健全な判断					-.295**	-.094	.215**	-.198**
従順さ						-.142	-.190*	.134
責任感							-.056	-.283**
興味								-.139
よい生徒								

\*\*p<0.01, \*p<0.05

先ほどの分析結果で、都市民と流動人口の集団間で差異が確認された養育価値項目を取り上げて、学歴ならびに職業形態とそれらとの相関を示したものがそれぞれ表9・10である。ここで階層の変数のひとつとする職業形態は、単純に順序尺度として用いることは適切とはいえないが、コーン・モデルの職業的地位の分析結果を踏まえて、それぞれの職業形態の区分における従業上の心的機能に与える影響（＝転移）を3問法の順序尺度で想定されるものとした。

結果、両集団において階層変数と養育価値項目との関連がみられるものとして、都市民集団内では5%の有意水準で職業と「よい生徒であること」との関連がみられたが、それ以外の関連はみられなかった。また、流動人口の集団内では学歴と「責任感があること」とが1%の有意水準で関連がみられたが、それ以外の項目に対してはほぼ関連が認められなかった。したがって、このように都市民と流動人口の集団に区分して、各回答者の集団内において階層変数と養育価値項目との関連を検討した結果、必ずしもコーン・モデルのような関連が見出されるとは限らないことが明らかとなった。つまり、都市民と流動人口とは、単純に産業社会構造における階層的な差異のある集団区分であると捉えるのではなく、少なくとも学歴や職業以外の他の要因が背後に存在していると考えられる。

#### 4) 知見と考察

本節では、中国の流動人口の養育における価値観にアプローチするためのひとつの方法として、コーンによる養育価値の概念ならびに13の養育価値項目を適用し、昆明市の市民および流動人口を対象とするアンケート調査の回答結果から、親の養育的価値の分析ならびに結果の考察をおこなった。とくに流動人口のアンケート調査のみではなく、別個に同一市内の市民をサンプリングしたアンケート調査の結果を含めて同様に分析・検討することによって、コーン・モデルの解釈の可能性および中国社会の独自性による影響を明らかにしようとした。

まず、都市民ならびに流動人口の回答データの分析結果でみてきたように、都市民と流動人口との集団間には属性に関するいくつかの差異があらわれた。年齢や学歴、職業形態、そして民族的マイノリティの割合などから、流動人口には中国の都市社会の下層を形成する集団的特徴がみられた。つぎに、13の養育価値項目の分析では、コーン・モデルにお

ける自己指向的な養育価値を形成する価値項目群の平均得点に関して、流動人口の回答者よりも都市民の回答者のほうで、それらの平均得点はより高いものであった。一方、外的権威への同調を特徴づけるであろう養育価値の項目群については、都市民の回答者よりも流動人口の回答者のほうが、より高い平均得点をマークしていたのであった。また、都市民ならびに流動人口の両集団間における13の養育価値項目の平均得点の差異に統計学的な根拠を確認するためにt検定をおこなった。その結果、やはり平均得点に格差のある養育価値の諸項目での差異が確認された。

つぎに、都市民と流動人口という2集団間にみられた養育価値の項目に関する差異が、コーン・モデルのように「学習の転移」を根拠とする、学歴や職業等の階層的な要因の差異によるものであるのか、あるいは中国社会独自の他の要因による可能性が考えられるのかどうかの問題に対処するため、都市民と流動人口それぞれの集団内において階層的な変数と養育価値項目の得点との関連を分析した。その結果、都市民ならびに流動人口それぞれの集団の回答データからは、階層の変数と養育価値の項目との関連はほとんどみられないことが示された。

これらの結果の背景として考えられることは、冒頭で仮説として提示した中国社会の特殊性（歴史文化／政治経済的諸要因）が投影されたものと解釈できる。より具体的にいえば、中国社会特有の作用(歴史文化／政治経済)を背景として、職業的地位が職業的諸条件と無関係であること、職業的諸条件が異質なものとなっていること、特有性が職業的地位(社会構造)による作用を上回って価値観に影響を与えていること(=コーン・モデルの否定)、であった。以上の3つの要因はそれらのどれもが原因としてあてはまっている可能性がある。しかし、本研究のテーマに即して確認されるべきことは、農村社会で培われてきたであろう階層・文化的な均一性は、学歴やその他の要因による養育価値に対する影響を相殺しているのか、あるいは、コーンの養育価値志向に影響を及ぼすような別の第3の階層的な要因が存在しうることである。

以上の諸点を考慮していえば、昆明市を対象とした本調査の結果は、流動人口における養育の価値観に関して、産業社会での職業や学歴などの影響力よりも、むしろ中国特有の歴史や文化、政治経済要因の影響が強いという点で、コーン理論の一般化に修正・制限を与えるものとなる。しかし見方を変えれば、中国の流動人口という独自のマイノリティ集団の間において、子どもの養育に対してより都市社会の文化的な価値観(=高階層の養育の価値観)に近い価値志向性を保持しうる人々、あるいはその反対の価値志向を保持する人々

に対するその集団的特性や要因が検討されるべきであり、ここに新たに探求されるべき課題が発見されたといえよう。

---